JICA エキスパート

みやざき

第 24 号
NOV.2021

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

宮崎 JICA 派遣専門家連絡会の役割について　乗 峰 潤 三
陸の見えない海を泳ぎながら　桐 野 有 美
できることから世界と関わり続ける　長 岡 美 里
温故知新 < 伝統と革新の融合、人材育成と知識シェアリング >　吉 成 安 恵
外国人材・多文化共生支援　永 友 紀 章

宮崎 JICA 派遣専門家連絡会の役割について

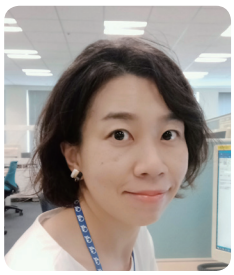
宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会会長
宮崎大学農学部　**乗 峰 潤 三**

会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。コロナ感染拡大と同時期に会長職を拝命して早くも２年目に入りました。今年度はコロナ感染が最悪の状況になり、多くのイベントが中止になったうえに、私の健康状態も最悪の状態に陥りました。結局入院・手術という事態となり、誠にご心配をおかけしました。その後、術後の経過も良く、順調に回復しています。それと同時に、ワクチン接種普及の効果があったのか、ようやくコロナ感染もおさまってきているようで、気持ちも明るくなりつつあります。この調子であれば、来年度はコロナの時代以前のような、通常の JICA 派遣専門家連絡会の活動、特に JICA 協力３団体合同総会（宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会、宮崎県海外協力協会、宮崎県青年海外協力隊を支援する会）が対面で開催できるかもしれないと期待しているところです。

さて、今回は何を書こうかと考えていましたが、宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会に何ができるのか、期待されている事は何なのかについて、前回の専門家連絡会九州地区ブロック会議で上った内容を復習してみる事にしました。実際、期待されている派遣専門家連絡会の役割ははっきりせず、活動に対するモチベーションも上がらないという会員の方も多いと思います。また、それ程期待されている訳でもないので、同窓会的な活動でいいという考え方もあるのかもしれません。ブロック会議での話からも、会の役割は具体的に定められている訳ではないようです。とは言え、ざっくりとですが、会の役割を会議で上がった内容から５つ程にまとめてみました。番号は優先順位ではありません。1. 会員と JICA とのつながりを確保する、2. 会員の今後の派遣機会につなげる、3. 専門家としての経験を，地元社会に還元する、4. 次の世代の専門家を育成するために，自分の経験を伝える、5. 同じ JICA から禄を得たものと

して，同志としてのつながりを維持する（昔話に花を咲かせたい、または、国際協力分野で活動するものとして，同分野の人達と交流を深めたい等）。そして、JICA が派遣専門家連絡会を支援している根拠としては、派遣専門家に限らず、国際協力分野に携わる人々（民間、NGO や国際機関などを含む）の交流を支える事だそうです。いずれにしても、これまで本会が行ってきた活動は、間違いなくこれら全てに合致しているように思います。その他にも、これは大切な役割ではないかと思われるものがありましたら、是非お知らせください。役割だけでなく、単純にどうやったら楽しく活動ができるか等のアイデアも大切かもしれません。

実は、2005 年の第 7 号 JICA エキスパートに、当時の永田会長が書かれたタイトルが「宮崎 JICA 派遣専門家連絡会の役割」でした。読み返してみても、その当時と役割は全く変わっていないように思います。ですので、引き続き本会の活動が、益々発展致しますよう、関係各位の皆様方のご高配をよろしくお願い申し上げます。



陸の見えない海を泳ぎながら

国際協力専門員（元 JICA ミャンマー技術専門家）
桐　野　有　美

急ぎ一時帰国の準備をせよ、という JICA 事務所からのメールを受信したのは、2020 年 3 月、日本国内で新型コロナウイルス感染症流行が始まって間もなくのことでした。宮崎大学を辞職し、ミャンマー第二の町、マンダレーに夫と 2 歳と 4 歳の子供を伴って赴任し、8 カ月が過ぎようとしていました。

ミャンマーの口蹄疫対策プロジェクト

ミャンマーが軍事政権のもとで国際社会から孤立する中、1990 ～ 2000 年代の東南アジアにおける JICA の家畜衛生分野の支援は、家畜の重要疾病の診断能力に重点を置いた技術投入が主体であり、タイでの成果をマレーシア、ベトナム、ラオス、カンボジアなどの ASEAN 諸国に波及させる段階に来ていました。ミャンマーもその広域計画の中に含まれてはいたものの、長年の鎖国によって、人材育成が停滞というより後退していたことが大きな足かせとなっていました。例えば、ある疾病の診断に必要な検査技術の指導が行われましたが、ミャンマーではその後 15 年間、その疾病が疑われたことも、検査されたこともありませんでした。その疾病によって農場に異変が起きていたとしても、村落で診療を行う現場従事者（コミュニティアニマルヘルスワーカー）がその疾病を知らなければ、あるいは異変の原因をつきとめようと思わなければ、またそれを国の畜産局に報告するための実質的なシステムが存在しなければ、そして検査材料を中央の診断ラボに送付して確定診断をすることの必要性と意義が日常的に現場と中央で共有されていなければ・・・その疾病は永遠に診断されることはないのです。診断技術基盤の形成を図る中央レベルへの投入の一方で、実際に疾病が発生する農村の現場においては、現場従事者の能力も、診断ラボとの連携も未熟でした。

2019 年にミャンマーで始まった「口蹄疫対策のための組織能力強化プロジェクト」は、まさにそのような問題に多角的にアプローチしようとしていま

した。口蹄疫は、国境を越える家畜疾病の中で最も重要なもののひとつです。2010年に宮崎県で発生し、おびただしい数の家畜の命を奪い、畜産のみならず地元経済に大打撃をもたらしたアウトブレイクが記憶に新しいと思います。当時、青年海外協力隊員としてルワンダで活動していた私は、このニュースを目の当たりにし、越境性家畜感染症に対する水際防疫の限界を感じるとともに、こうした脅威から日本の畜産を守るためには、国際的な取り組みによって流行地域の感染圧を下げることが必要であることを痛感しました。病原体のプールとなっている国の多くが、家畜疾病の監視や感染拡大防止策を講じることが困難な開発途上国です。国際協力の現場で、そうした国々の畜産振興に貢献することを希望し続けてきた私にとって、このミャンマーの技術協力プロジェクトへの参画は、待ちに待った機会でした。

≪写真１≫国営農場の牛を使ってワクチン投与試験を行う（筆者右側）

専門家の引き揚げとリモート支援

ミャンマーでの口蹄疫プロジェクトは、ＪＩＣＡ無償資金協力で当時ヤンゴンにて着工したばかりの口蹄疫ワクチン製造施設が、効果的に稼働するために必要な、包括的な技術支援を行うものでした。施設の完成を待ちつつ、国営農場の牛を使って、試作ワクチンの効果を判定する評価系を確立したり、地方の診断ラボが抱える課題を抽出したり、診断ラボと畜産現場とのリンケージを強化する研修の準備をしたりしながら、最初の年が過ぎていきました。これまでミャンマーの畜産局の統計にも含まれず、ドナー機関も介入対象にしてこなかった、季節性移動牛群の家畜衛生上のリスクを評価する調査も佳境に入っていました。

≪写真２≫草地を求めて村を離れ、牛と共に移動を繰り返す牛飼いの家族

そんな2020年春、冒頭の退避帰国が指示されたのです。バタバタと身の回り品だけスーツケースに詰めて帰国した時は、数カ月で再赴任できると楽観視していました。ところが、日本での流行が落ち着いてきた頃、ようやく新型コロナウイルス感染症の検査体制が立ち上がったミャンマーで同症の感染拡大が明らかになり、現地の医療体制がひっ迫し始めました。再渡航の見通しが立たない中、まるで陸の見えない海を泳いでいるような気持ちで、それでもリモートでできることを続けました。陸こそ見えないものの、ＩＣＴ技術の恩恵という浮き具を使って泳ぎ続けることができたと言えます。プロジェクトの現地スタッフやカウンターパートらと頻繁にメールでやり取りし、研究所スタッフの心得と基礎的な手技に関するミャンマー語版ガイドブックを作成したり、広大な村落をバイクで駆け回る現場従事者たちをＳＮＳでグループ化し、診断と治療について意見交換を重ねたりすることができました。ブラックボックスだったミャンマー農村部の畜産現場で、現

場従事者が診断に苦慮しているのはどんな疾病なのか、そして科学的根拠に基づく治療の普及を阻害しているのは何か、ということが、このグループでのやり取りを通してリアルに浮かび上がってきました。現場の問題に確実にアプローチするための重要な情報です。我々専門家が再渡航した暁には、これらを活用した新しい技術研修を展開しようと、チーム一同楽しみにしていました。

2021年が明けるとともに、新型コロナウイルス感染症流行下での専門家の再渡航が始まり、私達も査証等の準備を始めました。その矢先の2月1日、誰も予想していなかったミャンマー国軍によるクーデターが勃発したのです。一足先に再渡航を果たしていた他の専門家も、新型コロナウイルス対策のための隔離施設から引き続きホテルに缶詰めとなりました。そしてそのホテル玄関前でも市民と治安部隊との衝突が起き始めた3月上旬、一度もプロジェクトサイトに足を踏み入れることなく、再び退避帰国の途に就きました。

真っ暗な海に浮かぶ国

この原稿を書いている今も、ミャンマーでは国軍による常軌を逸した暴力が続き、市民は深刻な人道危機に直面しています。ミャンマーに対する日本のODAの正義について、世論も厳しい目を向けています。一方で、医療従事者を含む多くの公務員が市民不服従運動と称するストライキを続けている中、新型コロナウイルス感染症が爆発的に流行しています。たとえ同症の流行が下火になり、国軍が民主化を求める市民を暴力で抑え込んで、見かけ上の安定が戻ったとしても、国民が軍事政権に背を向け、我々のカウンターパートである公務員が生活の糧を犠牲にして不服従運動を続ける中、いったい誰を相手に人材育成を行えばいいのでしょうか。陸の見えない夜の海に、浮き具もつけず放り出されたこの国の未来を思うと、暗澹たるものが胸に広がります。

新型コロナウイルス禍による国際社会の混乱の先には、「新たな技術に伴われて、物理的な距離とか国境とか言語とか、あまり障壁とならない社会が待っている」という、本誌第23号（2020年12月）の河澄恭輔国際連携センター准教授のお言葉に強く共感し、希望を見出そうとする今日この頃です。

≪写真３≫退避帰国前に専門家が撮影した、民主化を求める市民

できることから世界と関わり続ける

在スリランカ日本大使館
長　岡　美　里

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の皆さま、こんにちは。長岡美里と申します。

2019 年 12 月より JICA 海外協力隊としてモザンビークで活動しており、現在は在スリランカ日本大使館で草の根無償資金協力の委嘱員として国際協力活動に従事しております。

宮崎生まれ宮崎育ちの私は、どうやら常夏の国に縁があるみたいです。モザンビーク・スリランカともに、穏やかな気候と温かい気質をもった人々に溢れており、これらの国での生活の日々はいつも故郷である宮崎を思い出させてくれます。

また、母校である宮崎大学には、農学部の学生として、そして昨年は宮崎大学国際連携課のスタッフとしても大変お世話になり、私にとっての宮崎は、どんな時も温かく迎えてくれる心の拠り所であると同時に、人生に大きな影響を与え続けてくれる大切な場所でもあります。

～国際協力との出会い～

そんな私が国際協力に興味を持ったきっかけは、大学 3 年時のキャリアセミナーでした。佐伯教授の担当回で青年海外協力隊 OG（国際協力推進員）の方の体験談を聞く機会があり、そこで初めてＪＩＣＡ，青年海外協力隊の存在を知ることになります。国際協力＝ボランティアと考えていた私にとって、国際協力の仕事との出会いは非常に衝撃的なものでした。テレビで見る貧困や紛争の映像に心が揺れることはあっても、物理的な距離も遠く、ましてや自分自身にできることなど皆目見当もつかない状況に、漠然とした関心と無力さだけを感じ続けていました。

その世界の現状に対し、開発国の現場で現地の人とともに課題解決に向き合える“青年海外協力隊”の存在は、私にも何かできることがあるのではないかと、国際協力の世界に一歩踏み出すきっかけを与えてくれました。

～協力隊での活動～

初めて降り立ったモザンビークの首都は、私が描いていたアフリカのイメージとは 180° 異なるものでした。立ち並ぶ高層ビルや裕福なホームステイ先での生活。あまりの発展ぶりに衝撃を受けたものです。もちろん、地方の配属先に移ってからは、蛇口から水が出ない生活が待ち受けていましたが、テレビで見ていた貧困のアフリカも確かにアフリカの一部分であるという事実に、あらためて国際協力の必要性を感じることができました。

栄養改善を目的に赴任した任地では、母子手帳の記帳作業、妊産婦向けの栄養講座や離乳食の実演などを通じて、現地の栄養状況を調査しました。調査の結果、栄養があるものは何か知っている、栄養があるものも手に入る、ほとんどの妊婦が産前産後のケアを無償で受けることができる。栄養改善に対してほぼ需要がないことに加え、配属先からは任地で盛んな養蜂の普及や販売促進を行ってほしいとの要望が挙げられる始末。彼らのニーズに対して自分に

できることがない現状に、以前テレビ越しに感じていた無力感が再び沸き上がってきました。

現地の食事

離乳食講座の実演

～帰国後の１年～

赴任４か月が経とうとした頃、世界的な感染症の拡大を受け､任期半ばでの帰国を余儀なくされます。帰国当初こそ現実を受け入れられなかったものの、この帰国をブラッシュアップの機会と捉え、すぐに養蜂指導の受け入れ先を探し始めました。急な申し出にもかかわらず、宮崎の養蜂家さんが快く引き受けてくださることになり、ミツバチの管理方法や採蜜の仕方を一からご指導くださいました。また、モザンビークの農業隊員たちと養蜂研修を企画し、モザンビークの同僚に採蜜の様子を解説した動画を届けるなど､遠隔での支援も続けることができました。

その一方で、国内での待機期間の終了も迫る中、依然収束の兆しが見えない状況に、進路そのものを悩む日々が続きました。引き続き養蜂を続けながら

養蜂研修の様子

採蜜動画

協力隊の再派遣を待つか、大学院に入り農業を学び直すか、派遣可能な国のポストに応募し現場経験を積むか。そのような状況の中、宮崎大学国際連携課でB-jet事業（バングラデシュICT人材育成事業）の担当として採用いただくことになります。B-jet事業とは、日本のIT人材不足の課題とバングラデシュの就業機会の不足の課題を双方向で解決していくプロジェクトで、私の考える国際協力に新たな価値観を提供してくれました。国際協力の事業の中には、一方方向の支援スタイルも多い中、ビジネスや地方創生の要素も兼ねそろえたB-jetプログラムは、ともに発展しあえる画期的な事業で、国際協力の理想的なあり方だと非常に魅力に感じました。

また、協力隊からの一時帰国の期間は、地元の農家さんとの関わりや、国際連携課での業務を通して、世界の問題だけではなく、日本や地方の課題に対しても目を向けることができ、国際協力の在り方を考えるうえで、貴重な１年となりました。

～できることから世界と関わり続けたい～

最終的に、開発の現場に後ろ髪を引かれ、現在スリランカで国際協力に従事しております。現在の仕事では、現地のＮＧＯと協力して給水設備や学校校舎の建設、地雷の撤去活動などを行っています。大学３年時の出会いからまもなく10年。国際協力との関わりについてはいまだ模索中の日々を送っていますが、これからも日本や地方を含めた世界の出来事に目を向け続け、自分にできることから世界と関わり続けていきたいと思います。

温故知新＜伝統と革新の融合、人材育成と知識シェアリング＞

JICA 九州センター
吉　成　安　恵

宮崎県派遣専門家連絡会の皆さま、日頃よりJICA 事業へのご理解とご支援を誠にありがとうございます。2021 年４月に JICA 九州センター所長として着任致しました吉成安恵です。一部の方は「おや？」、「どこかで聞いた名前、、」と思われているかもしれません。その通り、2011 年から 2015 年まで JICA から宮崎大学に出向させていただいておりました。今般は勤務先が福岡県で、所掌は九州７県となりますが、特段に宮崎県とのご縁を感じ、皆さまと再度関わらせて頂くことは無類の喜びです。改めまして、どうぞ宜しくお願い致します。

４月の着任後、コロナ禍で着任の挨拶回りもままならぬ状況でしたが、７月に入り、順次各県を訪問させて頂いております（本稿執筆中の７月初旬現時点では、まだ宮崎には訪問叶わず申し訳ございません）。先日は鹿児島県に伺いました。その際に、島津藩別邸の仙巌園に寄らせていただきました。実はかつて宮崎大学勤務時代に宮大の外国人留学生の引率者として同園に行ったのが初めてのきっかけで、再度ゆっくり視察したいと思っていた場所でした。最も関心があったのは、立派な邸宅でも日本庭園でもなく、同敷地内にある集成館（西洋技術を取り入れた薩摩藩独自の工業技術の開発・実験施設）でした。日本の近現代における産業革命の先駆けであり、ここから九州圏内に留まらず東北、北海道まで製鉄等を中心とした工業化の波が伝播していった歴史に強く惹かれました。

島津家 28 代斉彬が集成館事業を始めたのは幕末の 1851 年でした。本来、別邸として賓客をもてなすお屋敷とおもいきや、敷地内全体に製鉄、ガス灯、水動力等の実証実験場が随所に配置されているのです。海外との交流が厳しく統制されていた時代にあっても、当時の僅かな西洋の技術文献を独自に翻訳し、また幕府に咎められないよう巧妙に外国人知識層を藩内に招き入れて情報を得る等、海外先進技術への貪欲なまでの探求心の熱量に感じ入ります。また、西洋技術の吸収を図るばかりでなく、既に有している伝統技術との融合も志向し、この実験工場で何度も何度も試行錯誤を重ねている姿を想像するに付け、国際協力に関わる者として、開発途上国の産業や技術発展の在り方と重ね合わせずにはおられません。

この集成館工場群で働いていた人は最盛期には

1,200 人余りで、当時の人口では相当な規模であったと思います。他の藩からも視察者を寛容に受入れ、求められれば全国各地に技術者を派遣したそうです。まさに世のために､技術の囲い込みではなく、広くシェアして更なる産業と社会の発展を希求したからだと思います。

翻って今。21 世紀に入り、世界各国との交流や情報伝達は、交通インフラの発達、ICT の技術革新等により格段に近く、早くなりました。一方、ご承知のとおり、世界全体をみますと、先端技術を獲得した特定メガ企業の市場独占化、国家の覇権主義や自国主義へと向かうなどの暗雲も現れており、コロナ禍で一層顕著になってきているように思われます。理想とする各国との連帯、国際協力の推進は、綺麗事ばかりではいかず、容易ではありません。
しかしながら、これまでに途上国の現地に赴き、また日本国内において、途上国の技術者や留学生に対し余りない情熱を込めてご指導いただいた専門家の方々や途上国の僻地にも赴き現地の人々との信頼を築いてこられた協力隊員方々の存在は、日本の誇りだと思います。世界との連帯を牽引、実践されてきた証として改めて勇気づけられます。この仙巌園邸内の掛け軸に「思無邪」（思いによこしま無し）の書がありました。混沌とした状況が続く今だからこそ、心清められる思いがしました。

外国人材・多文化共生支援

宮崎大学国際連携センター
永　友　紀　章

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会のみなさま、2021 年 4 月 1 日に国際連携センターに席をいただきました。前任者の河澄客員教授同様よろしくお願いいたします。

私は宮崎大学農学部を 1985 年に卒業してから青年海外協力隊に参加しザンビアに赴任、帰国後 1988 年に JICA に入職しました。以来 JICA で 32 年間勤務しております。海外勤務は、パキスタンとバングラデシュの 2 か国の JICA 事務所です。

宮崎県に居住者として戻ってくるのは 36 年ぶりですが、2011 年 3 月初めに 1 度だけ宮崎大学と宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会にお邪魔したことがあります。その後しばらくして、2011 年 9 月から宮崎大学に JICA 職員が出向させていただくようになりました。私事で恐縮ですが、実はそのころから次に宮崎大学に行くのは自分だと人事部には要望を出してきました。ようやく 10 年後に念願がかなったという次第です。

【外国人材の急増】

JICA の主たる活動現場は言うまでもなく開発途上国です。みなさまにも開発途上国のプロジェクトなどでご活躍いただきました。

一方、2018 年に入管法の改正が国会で審議され、同改正法が 2019 年 4 月 1 日に施行されるに至り、JICA でも国内に居住する外国人材に対する支援についても検討してきました。新しい動きですので、本稿で少しご紹介させていただきたいと思います。私自身は、やはり海外を向いて仕事をしておりまし

たので、開発途上国についての統計データなどの情報を調べることは多いのですが、日本国内のこととなると、政治や経済以外では、技術協力で必要となる農業や防災など特定分野の技術情報に限られています。

このため日本の県や市町村単位の統計データを見ることはあまりなかったのですが、法務省の在留外国人の統計データを見て国内の人手不足の深刻さを改めて思い知らされました。もとより日本経済は、バブルの崩壊から失われた30年を経ても低迷が続いており、先進国に引き離され、新興国には猛追されるという状況で、よそ様の国ことを心配している場合か、と私などは思うことがありますが、データを見て改めてそう感じます。

地方の経済状況はより深刻といわれて久しいですが、なかでも高齢化や若者の首都圏をはじめとする都市部への流出に伴い、製造業や農業などの現場では人手不足が顕著で、経済活動を維持するだけでも大変です。宮崎県においても、ここ数年で在留外国人が急増しました。在留資格で見ると、急増したのは、技能実習生であることが分かります。県全体では、技能実習生が約50%を占めますが、市町村単位でみると技能実習生が70%前後を占める自治体もあり、人手不足を補っていることがわかります。人口規模の小さな市町村に急に多数の外国人が居住するわけですから、自治体もコミュニティもあまり前例のないような対応に追われているのではないかと想像します。

【外国人材に選ばれる日本へ】

JICAは、開発途上地域と日本との人材還流を促進するために、開発途上国から日本に一時的に滞在して就労や実習を行い、将来的に母国で活躍することが期待される人材に対して、より包括的に支援かできるのではないかといろいろと試行しています。この背景には、外国人材から選ばれる日本に向けて努力しないと、世界的な労働力不足の中で日本は労働力を確保できなくなるという危機感があります。世界全体の人口はまだ増えているではないかと思うのですが、現実に労働力不足は、日本、韓国、台湾、欧米諸国で起きていますし、最近は中国も労働人口が減少に転じたといわれていますので、近い将来に労働力不足になる可能性があるかもしれません。

このように外国人材をめぐる競争はすでに始まっているのですが、外国人材は、当然のことながら、条件の良い国を選びます。日本は条件の良い国かというと、例えば、日本の平均賃金の伸び率は、韓国や欧米諸国よりも低いのが現実です。外国人材にとっても賃金は最も重要な条件でしょうから、この一事においても選ばれる国になるための対策は急務といえます。

【JICAと宮崎大学との連携】

とはいえ、法制度にかかわる問題や賃金の問題には関われませんので、他の機関との役割分担を念頭に置きつつ、JICAとしては、強みである開発途上地域における人材育成事業や移住事業の経験、日本国内における開発教育の経験、海外協力隊経験者等国際経験のある豊富な人材ネットワークなどを活かした支援を想定しています。

JICAはすでに「国際協力推進員（外国人材・共生）」を配置して外国人材の地域における多文化共生社会構築支援などに取り組んでいます。

加えてJICAは、国内貢献型事業の一環として、宮崎大学国際連携センターに「国際連携コーディネーター」を5月から配置しています。同コーディネーターは「宮崎大学国際人材プロジェクト」に参画しています。同プロジェクトは、今年度から始まったもので、①就職・活躍支援、②生活・地域定着支援、③日本語支援、④国際人材支援を行います。成果としては国際人材等の好循環が期待されています。これはJICAの人材還流促進と共通するもので、宮崎大学と連携することはJICAにとっても重要です。

【宮崎大学の取組】

宮崎大学は、県内唯一の国立大学として宮崎県の発展にも様々な貢献しています。直近では「宮崎－バングラデシュ・モデル」として有名な「日本市場をターゲットとしたICT 人材育成プロジェクト」を実施した実績があり、これは寄付講座と草の根技術協力に発展的に継承されるのですが、「宮崎大学国際人材プロジェクト」の実施にあたっても大きな強みになります。優秀な技術者を留学生として受入れて日本語教育などを行い、企業とのマッチングなどの就職支援をするというアイデアや実施して得られたノウハウは大変貴重です。2030 年の ICT 人材の需給ギャップは 45 万人という試算がありますが、日本人だけで埋めることは容易ではなさそうなことは想像できますので、「宮崎－バングラデシュ・モデル」の先見性や重要性が分かります。

専門性の高い外国人材は、ICT 以外の分野でも求められています。こうした中、宮崎県は留学生の就職支援を実施しています。これは県の産業振興の観点から重要な取組ですが、宮崎にいる外国人留学生はどう考えているのか、という視点も不可欠です。このため、国際連携コーディネーターを中心に在学中の留学生の協力を得て、宮崎県あるいは日本での就職に関する意識調査を実施しています。また、宮崎大学だけでなく、宮崎国際大学と南九州大学にも協力をいただいて同じ調査を実施しています。さらに「宮崎－バングラデシュ・モデル」で県内に就職した ICT 人材にも調査も行う予定です。これらは宮崎大学国際人材プロジェクトに資するのはもちろんのこと、県の施策促進にも役立つと思います。

私としては、宮崎大学でこのような業務にも携わることができ大変感謝しております。故郷である宮崎県に少しでも協力ができればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上

編集後記

JICA エキスパートより第 24 号をお届けさせて頂きます。今回は JICA 九州センターより吉成所長、JICA ミャンマー事務所より桐野専門家、在スリランカ日本国大使館より長岡さんに特別寄稿を頂きました。また、宮崎大学より乗嶺会長、永友准教授よりそれぞれ執筆頂きました。執筆者の方々、素晴らしい文章を執筆頂き、誠にありがとうございました。この場を借りて御礼を申し上げます。

東京オリンピックも無事終わり、コロナ渦も一段落ついたことで、世界的に制限されていたヒト・モノの移動が少しずつ緩和されてきています。従来の（伝統的な）国際交流・国際協力活動の緩和状況は「まだまだ」といったところですが、オンラインと伝統的な国際協力を上手くミックスした、新しい国際協力の形も全世界でその萌芽が見えつつあります。本連絡会も現在新しい連絡会のあり方を模索しています。ぜひ、本連絡会の活動について皆様のご提案、ご意見をお寄せください。御連絡は下記までお願い致します。

会長　乗峰潤三 <nori@cc.miyazaki-u.ac.jp>
幹事　山口良二 <a0d402u@cc.miyazaki-u.ac.jp>
大野和朗 <ohnok@cc.miyazaki-u.ac.jp>
永友紀章 <nagatomo.noriaki@cc.miyazaki-u.ac.jp>
大澤健司 <osawa@cc.miyazaki-u.ac.jp>
佐伯雄一 <yt-saeki@cc.miyazaki-u.ac.jp>
福林良典 <fukubayashi@cc.miyazaki-u.ac.jp>
井上果子 <kako.inoue@cc.miyazaki-u.ac.jp>
河野　久 <kawano.hisashi.x4 @ cc.miyazaki-u.ac.jp>
事務局：〒 889-2192 宮崎市学園木花台西 1-1 宮崎大学農学部内